

商品の「資本性」

—空所の純粹性から—

田 中 英 明

商品交換は、人間社会に必然的・自然的なものではなく、それはむしろ「共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で、始まる」¹⁾。こうしたマルクスの認識は、例えば「ある物を他の物と取引し、交易し、交換するという性向」を「人間の本性のなかにある一定の性向」とみなすスミスとは好対照をなしている²⁾。

こうした商品の外来性の認識は、交換を互酬や再分配と並ぶ経済の統合パターンとみなすポランニー³⁾にも通じており、商品を、特定の社会関係の中で、「私的所有者」が所有物に与える「形態」として把握することを可能にした。資本主義社会の総体的な認識をめざすマルクスの試みは、スミスのように分業労働ではなく、商品から貨幣・資本へと発展する流通形態の展開を出発点としている。だが、その理論展開において、商品の外来性はどのような意味をもっているのか、あるいはもつべきであったのか。マルクスが再三言及する共同体の間隙・空所における「本来の商業民族」のあり方を、単なる歴史的な事例とするのではなく、商品の一面を純粹に表わしているものと捉え直す必要はないであろうか。そのとき、商品世界の抽象方法はどのように再考を迫られることになるのか。本稿はこうした観点から、経済学体系の端緒における商品の規定を検討するものである。

商品を「発生」させる社会関係の特質を掘り下げていくと、商品には、「資源」であるがゆえに自ら消費しえない「非使用価値」として、増殖が求められ

1) Marx (1867) S.102 訳118頁

2) Smith (1776) p.25 訳116頁

3) ポランニー (1989) 第3章

る「資本性」が内包されているという側面が現れてくる。それはまた、貨幣や資本の展開や、市場における「商人資本」の位置づけなどについても、根本的な見直しを求めるものとなろう。

I 商品の外在性と外来性

商品交換が「共同体の果てるところ」で始まるとするマルクスの指摘は、『資本論』では第一巻第一篇「商品と貨幣」の第二章「交換過程」でなされている。またそれ以前に『経済学批判』でも、「諸商品の交換過程は、もともと自然発生的な共同体の胎内に現われるものではなく、こういう共同体の尽きるところで、その境界で、それが他の共同体と接触する数少ない地点で現われる」⁴⁾と同様の指摘がなされ、さらにいわゆる『経済学批判要綱』の「序説」でも、「交換を共同体のただなかに本源的な構成要素として措定することは、およそまちがいののである」⁵⁾と述べられている。このように商品交換の外来性の認識をマルクスは一貫して持ち続けていたのであるが、それは単に歴史的な認識であるにとどまらない。マルクスは共同体にとって商品交換が外来的である根拠として、「ある使用対象が可能性からみて交換価値であるという最初のあり方は、非使用価値としての、その所持者の直接的欲望を越える量の使用価値としての、その定在である。諸物は、それ自体としては人間にとって外的なものであり、したがって手放されうるものである。この手放すことが相互的であるためには、人々はただ暗黙のうちにその手放されうる諸物の私的所有者として相対するだけでよく、また、まさにそうすることによって互いに独立な人として相対するだけでよい。とはいえ、このように互いに他人であるという関係は、自然発生的な共同体の成員にとっては存在しない」⁶⁾というように、商品という形態の外在性を指摘している。

すなわち、物が商品という形態をとるのは、個々人が互いに私的所有者とし

4) Marx (1858-61) S. 129 訳240頁

5) Marx (1857/58) S. 38 訳①54頁

6) Marx (1867) S. 102 訳117頁

て相対するという関係においてであり、土地と生産条件を所有する共同体の成員であることに媒介されて個人が労働の客観的条件と結びつく共同体には、商品は存在しない。共同体の内部では「個別化された個々人の立場」⁷⁾そのものが生みだされないのであり、商品交換をもたらす関係性が共同体にとって外在的であるがゆえに、商品経済の発展は外来的たらざるをえないというのである。

Ⅱ マルクスの商品・価値規定—社会的な物質代謝の全面的な媒介

ところが、『資本論』の冒頭では、「ある一つの商品、たとえば一クォーターの小麦は、x量の靴墨とか、y量の絹とか、z量の金とか、要するにいろいろに違った割合の諸商品と交換される」⁸⁾というように、諸商品が他の諸商品と全面的に直接交換される世界が想定されている。

マルクスは、諸商品が等値される交換関係から、いわゆる蒸留法によって価値の実体として「抽象的人間労働」を見いだすのであるが、単に諸商品が労働生産物であることのみが前提されているのであれば、「労働生産物の有用性と一っしょに、労働生産物に表わされている労働の有用性は消え去り、したがってまたこれらの労働のいろいろな具体的形態も消え去」⁹⁾った後に残るのは、個々の商品に直接対象化された労働ということになろう。ところが、マルクスは「それらに共通な社会的な実体」として、「社会的に必要な労働」を見いだす。そこでは、まず個々の商品が「それが属する種類の平均見本」とみなされることで、個々の生産条件や労働の熟練や強度は、「社会的平均」へと均される¹⁰⁾。さらに、この必要労働時間は「労働の生産力に変動があれば、そのつど変動する」¹¹⁾のであって、過去において対象化されたものというよりも、再生産の観点から捉えられている。

このように蒸留の結果「社会的に必要な労働」が見いだされるためには、冒

7) Marx (1857/58) S. 22 訳①26頁

8) Marx (1867) S. 51 訳50頁

9) *Ibid.*, S. 52 訳52頁

10) *Ibid.*, S. 53-54 訳53頁

11) *Ibid.*, S. 54 訳54頁

頭の商品世界において、すでに商品は個々に評価されるのみではなく、同種の商品が無差別に売買され、種として社会的に評価されている必要がある。だが、こうした社会的な評価—宇野弘蔵的な意味での貨幣の「価値尺度機能」—のためには、「資本の、したがってまた労働の種々たる生産部門間の移動」¹²⁾という機構が前提となろう。

ところが、マルクスは、「諸商品は貨幣によって通約可能になるのではない。逆である。すべての商品が、価値として対象化された人間労働であり、したがって、それら自体として通約可能だからこそ、すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の—商品で共同に計ることができるのであり、また、そうすることによって、この独自の—商品を自分たちの共通な価値尺度すなわち貨幣に転化させることができるのである。価値尺度としての貨幣は、諸商品の内在的な価値尺度の、すなわち労働時間の、必然的な現象形態である」¹³⁾というように、そうした機構に先立って、抽象的人間労働に直接に社会性をみている。

このように、単に商品を掘り進むだけで、ある種の社会性をもつ抽象的人間労働が掘り出されるのは、それがあらかじめ冒頭の商品の内に埋め込まれているからであろう。ではマルクスは、どのような社会性を埋め込んだのであろうか。マルクスは、商品世界の物神性が、「商品を生産する労働の特有な社会的性格から生ずるものである」と確認した上で、「およそ使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにはかならない。これらの私的諸労働の複合体は社会的総労働をなしている」¹⁴⁾としている。だが、単に商品を生産している私的諸労働を束ね合わせても、必然的に社会的総労働をなすことにはならない。私的な労働そのものに、社会的総労働の一分枝という性格が、いわば自然属性として含まれているはずもないからである。つまりは、「互いに独立に営まれながらしかも社会的分業の自然発生的な諸環として全面的に依存しあう私的諸労働」¹⁵⁾というあり方は、最初から直

12) 宇野(1959) 52頁

13) Marx (1867) S.109 訳125頁

14) *Ibid.*, S.87 訳98頁

15) *Ibid.*, S.89 訳101頁

接に前提されているのである。

このように、『資本論』冒頭で商品が指定されるのは、社会的な物質代謝を商品交換が全面的に媒介する世界であり、商品の積極的な要因としての価値も、こうした物質代謝の一環という社会的・全体的な概念として規定されている。

Ⅲ 冒頭商品世界と交換過程論

では、こうした社会的分業を全面的に媒介する商品世界における理論展開の中で、商品交換の外在性や共同体の境界での商品形態の発生への留意が求められるのはなぜであろうか。

マルクスは『経済学批判』では、第一章「商品」の中で、「ある一商品の交換価値は、他の諸商品の使用価値で自己を表わす」といういわゆる価値形態を考察し、たとえば一エレのリンネルの交換価値は「他のすべての商品の使用価値がその商品の等価物となっている、限りなく多数の等式」の「総和」で表現されるとする¹⁶⁾。そして「だがこうして一商品はその交換価値を他のすべての商品の使用価値で測ると同時に、逆に他のすべての商品の交換価値は、それらによって測られるこの一商品の使用価値で測られる」として、リンネルが他の諸商品の交換価値の「共通の尺度」として役立つという価値形態が指摘される¹⁷⁾。しかしここにはたとえばリンネルといった特定の商品だけが一般的等価物として排除される論理は含まれておらず、「交換価値としては、各商品は、他のすべての商品の交換価値の共通の尺度として役立つ一つの排他的な商品であるとともに、他方では、他の各商品が多くの商品の全範囲でその交換価値を直接に表わす場合の、その多くの商品のうちの一つにすぎない¹⁸⁾」とされるにとどまっている。

ここでマルクスは「互いに独立した諸個人が成立させる社会的過程」¹⁹⁾である個々の商品所有者による「交換過程」へと考察の場を移し、先のリンネルの

16) Marx (1858-61) S. 117 訳227頁

17) *Ibid.*, S. 118 訳228頁

18) *Ibid.*

19) *Ibid.*, S. 120 訳231頁

等式の逆転—一般的等価物としての排除—は「交換過程それ自体の社会的な結果」²⁰⁾であるとし、さらに「すべての商品の交換価値の適格的な定在を表わす特殊の商品」である貨幣を、「諸商品が交換過程それ自体において形成する、諸商品の交換価値の結晶である」とするのである²¹⁾。そして、この交換過程における貨幣の形成過程が具体的に示されているのが、「他の共同体と接触する数少ない地点」での商品交換過程の発生に続く、「ここで物物交換が始まり、そしてそれがそこから共同体内部にはねかえり、これに解体的な作用を及ぼす。だから、異なった共同体のあいだの物物交換で商品となる特殊的使用価値、たとえば奴隷、家畜、金属が、多くの場合、共同体内部での最初の貨幣を形成する」²²⁾という記述なのである。

それに対し、『資本論』では交換過程論が第二章とされて価値形態論との分離がなされ、さらに第二版以降、第一章「商品」における価値形態の記述が初版付録「価値形態」を基に拡充され、「貨幣形態」の生成までを示した上で、再度第二章の交換過程論で貨幣の発生を論じるという構成となっている。

しかし、価値形態論での「価値表現の発展」は、「単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」(形態Ⅰ)から「貨幣形態」(形態Ⅳ)に至る価値形態の移行という論理的な発生の形式で説かれているものの、実際に展開されているのは、各形態の価値表現形式としての妥当性の比較であって、形態間の「移行」に際しては背後での現実の商品交換の発展が示唆されている。

たとえば、「全体的な、または展開された価値形態」(形態Ⅱ)から「一般的価値形態」(形態Ⅲ)への移行は、「じっさい、ある人が彼のリンネルを他の多くの商品と交換し、したがってまたリンネルの価値を一連の他の商品で表現するならば、必然的に他の多くの商品所持者もまた彼らの商品をリンネルと交換しなければならず、したがってまた彼らのいろいろな商品の価値を同じ第三の商品で、すなわちリンネルで表現しなければならない。—そこで、20エレのり

20) *Ibid.*, S. 124 訳236頁

21) *Ibid.*, S. 128 訳239頁

22) *Ibid.*, S. 129 訳240頁

リンネル＝一着の上着 または＝10ポンドの茶 または＝etc. という列を逆にすれば、すなわち事実上すでにこの列に含まれている逆関係を言い表わしてみれば、次のような形態が与えられる²³⁾と説かれている。このいわゆる「逆関係」の指摘は、現実にはリンネルが「他の多くの商品と交換」されている事態に依拠している。確かに、実際に交換が成立していることを前提とするならば、価値表現は相互的であり、逆関係が含まれていることになろう。その上で、あらためて形態Ⅰと形態Ⅱの欠陥を指摘しつつ、形態Ⅰが「実際にはっきりと現われるのは、ただ、労働生産物が偶然的な時折りの交換によって商品にされるような最初の時期だけのこと」であり、形態Ⅱについても、「はじめて実際に現われるのは、ある労働生産物、たとえば家畜がもはや例外的にではなくすでに慣習的にいろいろな他の商品と交換されるようになったときのこと」だとし、それぞれの形態の、現実の商品交換の発展段階との照応関係が示されている²⁴⁾。

ここで他の多くの商品と交換されるのが先のリンネルではなく、「家畜」と例示されていることに注意されたい。第二節以来、任意の商品の例示として挙げられてきたリンネルによる表現は、価値の表現形式としては任意の商品が一般的等価物たりうることを示していた。それに対し、家畜は後の第二章「交換過程」で、「貨幣形態は、域内生産物の交換価値の実際上の自然発生的な現象形態である外来の最も重要な交換物品に付着するか、または域内の譲渡可能な財産の主要要素をなす使用対象、たとえば家畜のようなものに付着する²⁵⁾と唯一例示されているものである。ここでも実際には『経済学批判』と同様に、価値形態間の移行・貨幣形態の形成は、背後に個々の商品所有者が展開する商品交換の発展を予定した記述となっているのである。

したがって、価値形態論における、「一般的価値形態は、ただ商品世界の共同の仕事としてのみ成立する²⁶⁾」といった論理も、社会的分業の全面的な媒介

23) Marx (1867) S. 79 訳87-88頁

24) *Ibid.*, S. 80 訳89頁

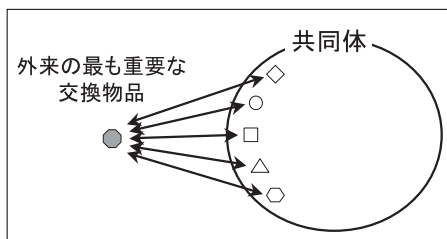
25) *Ibid.*, S. 103 訳119頁

26) *Ibid.*, S. 80 訳90頁

という商品世界では、社会的な価値概念に相応しい表現形式が明らかにされたにとどまる。第二章「交換過程」でマルクスは、「商品の分析」で明らかとなったのは一般的等価物の必要性までであって、個々の商品所有者による「社会的行為だけが、ある一定の商品を一般的等価物にすることができる」のであり、「貨幣結晶は、種類の違う労働生産物が実際に互いに等置され、したがって実際に商品に転化させる交換過程の、必然的な産物である」と宣言するのである²⁷⁾。

そして、交換過程における貨幣の形成では、マルクスは先に引用したように、「域内生産物の交換価値の実際上の自然発生的な現象形態である外来の最も重要な交換物品」と、「域内の譲渡可能な財産の主要要素をなす使用対象」とに着目する。こうした「共同体の果てるところ」で商品が発生する場においては、すべての商品が全面的に交換されるのではなく、特定の物だけが交換を求められるのであり、やがて右図のように

この物が「例外的にはなくすでに慣習的にいろいろな他の商品と交換される」段階へと至る。ここで、「物がひとたび対外的共同生活で商品になれば、それは反作用的に内部的共同生活でも商品になる」²⁸⁾のであれば、「外来の最も重要な交換物品」もまた、共同体内部でも商品となる。この自らの生産物ではない—外部から交換によって獲得した—外来の物品が、共同体内部で商品として、すなわち他の物品との交換のために保有されているという事態は、すでにこの物品が共同体内部の商品間の交換を媒介していることを意味しよう。このように「労働生産物の商品への転化が実現されるのと同じ程度で、商品の貨幣への転化が実現される」²⁹⁾というのである。



共同体内部でも商品となる。この自らの生産物ではない—外部から交換によって獲得した—外来の物品が、共同体内部で商品として、すなわち他の物品との交換のために保有されているという事態は、すでにこの物品が共同体内部の商品間の交換を媒介していることを意味しよう。このように「労働生産物の商品への転化が実現されるのと同じ程度で、商品の貨幣への転化が実現される」²⁹⁾というのである。

27) *Ibid.*, S. 101-102 訳116-117頁

28) *Ibid.*, S. 102 訳118頁

29) *Ibid.*, S. 102 訳117頁

こうして、商品交換の外在性を論理展開に導入することで、一般的等価物を形成する「社会的行為」とは、すべての商品が全面的に交換を求めあう商品世界から特定の商品を排除するというものではなく、共同体の境界で商品形態を発生させ、共同体内部に広がっていく過程そのものが、特定の物品に特殊な社会的性格を付与していく行為として理解されることになったのである。

IV 歴史認識と経済学の方法—商業民族の純粋性

ただし、『資本論』でも、商品所有者による「社会的行為」について、ここで解釈した以上の説明はなされていない。先に引用したように、共同体内部での「商品への転化」が「商品の貨幣への転化」と同時に実現されていくとされる過程が、単に「共同体内部にはねかえり」あるいは「反作用的に内部的共同生活でも商品になる」と、あたかも自動的な反応であるかのように説かれているだけである。

この「反作用」は共同体に「解体的な作用を及ぼす」以上、その大きな抵抗を受けるのであって、共同体の内部に互いに独立の私的所有として相対するという関係がどのように発生しうるのかということ自体が説明されなければならなかったのである。それが「反作用的」ではないからこそ、「古代アジア的とか古代的などの生産様式では、生産物の商品への転化、したがってまた人間の商品生産者としての定在は、一つの従属的な役割、といっても共同体が崩壊段階にはいるにつれて重要さを増してくる役割」³⁰⁾にとどまったというのがマルクス自身の歴史認識であった。

他方、「本来の商業民族」は、「エピクロススの神々のように、またはポーランド社会の気孔のなかのユダヤ人のように」、³¹⁾「古代世界のあいだの空所に」存在しており³¹⁾、こうした商業民族においてのみ「貨幣に支配的要素としての役割が与えられていた」³²⁾とも、マルクスは認識していた。「生産を行なう諸民

30) *Ibid.*, S. 93 訳106頁

31) *Ibid.*

32) Marx (1857/58) S. 38 訳①54頁

族はただいわば受動的商業を行なうだけ」であって、「交換を勧誘する媒介者たち(ロンバルディア人, ノルマン人など)」の外部からの働きかけこそが「交換を定立する活動への誘因」である(「対外商業の文明化作用」!)³³⁾。そして、この仲介貿易の担い手たちは、「古典古代世界の空所に住むセム族, 中世社会の空所に住むユダヤ人, ロンバルディア人, ノルマン人のように、これらの生産を行なう諸民族に対して、ある時は貨幣を代表し、ある時は商品を代表する」のである³⁴⁾。

貨幣の発生の論理のために、交換過程という理論的な場を求めたマルクスは、しかしながら貨幣の歴史的な発生の場³⁵⁾であった、共同体の間隙・空所の商業民族の側の意識や行動、あるいは、共同体の内部で外部からの浸透を受ける側と外部の商人³⁶⁾との関係性を含み込むような理論構築には向かわなかった。結局『資本論』でも、『経済学批判』と同様に、いわば歴史的発展のモードの提示にとどまり、論理的な貨幣の発生にまで至らなかったのはその帰結であろうか。

もっとも、資本主義社会の体系的な認識のためには、最も単純な範疇から出発しなければならず、例えば貨幣のような「まったく単純な範疇でさえ、それがその内包を充実させた姿で現われるのは、歴史的には、社会のもっとも発展した状態になってから以外にはありえない」³⁷⁾とすれば、経済学体系の冒頭に

33) Marx (1858-61) S. 67-68 訳148-149頁

34) *Ibid.*, S. 68 訳150

35) ボランニーによる「特定目的」貨幣と「全目的」貨幣の対比は、伝統的な貨幣論の近代主義的な偏りを明らかにし、人類学・歴史学の豊かな成果へ目を向けさせるものであった(ボランニー(1989)第9章)。しかし、近代的な貨幣とそれを生み出す社会関係の特殊性の理解のためには、こうした分類のみでは不十分であり、シュッツやウェーバー的な「外部貨幣」「内部貨幣」の概念(ウェーバー(1955))を併せて用いることが有効に思われる。「特定目的」を通じて共同体の再生産の一翼を担う制度的な「内部貨幣」の存在がいくら明らかとなろうとも、それらは共同体間で物象的な依存関係を形成していく「外部貨幣」とは異なるものである。資本主義社会の特殊性は、そうした「外部貨幣」と、やはり共同体にとって外部的な資本の運動が社会を編成していくところにある。

36) 「流通が商業のかたちで自立的存在をもつようになるのと同様に、貨幣が商人身分のかたちで自立的存在をもつようになる」(Marx (1857/58) S. 411 訳②168頁)。後述するように、貨幣形成の論理的な説明の行き詰まりは、資本の発生の説明をも困難に陥らせる。

37) Marx (1857/58) S. 38 訳①54頁

おける商品および価値の規定は、発展した資本主義社会から抽象されなければならないというのが、マルクスが明らかにした方法であった³⁸⁾。貨幣や資本の発生も、歴史的な過程の理論化ではなく、端緒の抽象的概念にすでに含まれていたものが、相互の内的関連を明確にしながら具体化されていく論理的な発生の過程なのである。

そこで問題は、冒頭の社会的な物質代謝を全面的に媒介する商品世界と社会的な価値の概念、そして交換過程論での商品所有者の規定が、資本主義社会からの抽象として果たして十分なものであったのかということになる。

先にみたように、商品自身が「商品語」³⁹⁾で語りあう価値表現の展開には、貨幣を発生させる「社会的行為」の論理が含まれていないために、あらためて交換過程論において商品所有者が導入されたのであった。商品所有者は、「生まれながらの平等派」である「商品には欠けている、商品体の具体的なものにたいする感覚」をその「五つ以上もの感覚で補う」のであり、彼にとって交換は「自分の欲望を満足させる」ための「個人的な過程」である⁴⁰⁾。ところがマルクスは他方で「彼は自分の商品を価値として実現しようとする」として、「そのかぎりでは、交換は彼にとって一般的な社会的過程である」とする。この同じ過程が「同時にただ個人的でありながらも同時にただ一般的社会的であるということはあるえない」という矛盾から、特定の商品を排除する「社会的行為」を導き出そうとするのである⁴¹⁾。

しかし、互いに独立した私的所有者が相対する交換過程は、あくまでも「個人的な過程」である。たとえ商品所有者達の構成する商品交換が社会的分業を全面的に媒介するものであったとしても、自らを満足させる使用価値を求めて自分の商品を手放す所有者の関心は、自らの欲望の対象である特定の諸商品に

38) マルクスは冒頭商品において単純商品生産社会を想定する「単純商品説」ではなく、基本的には「ブルジョアの生産の全体制」を前提にしたいわゆる「単純流通」の方法をとっている。Marx (1858-61) S. 52 訳117-118頁。高須賀(1979)。

39) Marx (1867) S. 66 訳71頁

40) *Ibid.*, S. 100-101 訳114-115頁

41) *Ibid.*, S. 101 訳115-116頁

限定されている。自分の商品が担う「交換価値」とは、このかぎりではそうした諸商品への交換手段という使用価値であればよく、「すべての他の商品の一般的等価物」⁴²⁾とみなさねばならない必然性は明らかではない。諸個人がなぜ・いかなる意味で自らの所有物に一般的・抽象的な価値を見いだすのかがまず問われなければならないのであって、全面的な商品交換社会から抽象された社会的な価値概念を前提としたのでは、個々の商品所有者の意識や行動を説き明かすことにはなりえないであろう。そして、全面的な商品交換社会という想定は、所有者にとって全面的に非使用価値であるという意味では、商品という形態を純粹に考察する場を提供しているかのようにみえるものの、そこでは自分の商品への関心が自らの欲望の対象への交換のみであるならば、商品とは非使用価値であるとはいっても、広い意味では自分を満足させるための使用対象であり、いずれ消尽される余剰物ということにしかならない。この想定では、個々の所有者と商品との関係性において、商品が抽象的な富の担い手として意識される契機を見出し難いのである⁴³⁾。

V 合理的な貨幣蓄蔵者—商品流通の発展を前提とした「資本への転化」

こうした商品や商品所有者の規定のために、個人的な過程のなかから交換を通じて、商品の消尽ではなく、その含む価値の維持や増殖が図られていく論理も、内的に説くことは困難となっている。

『資本論』第一巻第4章「貨幣の資本への転化」でマルクスは、単純な商品流通 $W-G-W$ では、買い $G-W$ において「この商品は使用価値として役立つ。だから、貨幣は最終的に支出されている」のに反して、資本としての貨幣の流通 $G-W-G$ では、その買い $G-W$ で「買い手が貨幣を支出するのは、

42) *Ibid.*, 訳116頁

43) 社会的分業の一分肢としての労働生産物を全面的に交換しあう所有者達という世界で、貨幣の発生を説こうとすると、マルクスが「浅薄な立場」と退けた「物物交換の技術的不便」に対処して「たくみに考案された方便」として貨幣を導入するような試み (Marx (1858-61) S. 130) や、あるいは、歴史上の様々な「内部貨幣」に依拠した制度論的な説明に接近せざるをえないのではなからうか。

売り手として貨幣を取得するため」であり「彼が貨幣を手放すのは、再びそれを手に入れるという底意があつてのことにほかならない。それだから、貨幣はただ前貸しされるだけなのである」と両者を峻別する⁴⁴⁾。商品交換に媒介された社会的物質代謝である単純な商品流通が、商品所有者達の「使用価値の取得、欲望の充足」という「流通の外にある最終目的」のための手段なのに対して、「自己目的」と化した資本の運動は、「ただ抽象的な富をますます多く取得する」という資本家の「主観的目的」によって担われている⁴⁵⁾。

この「絶対的な致富衝動」そのものは、「貨幣蓄蔵者は気の違った資本家でしかないのに、資本家は合理的な貨幣蓄蔵者なのである」とされているように⁴⁶⁾、第3章「貨幣または商品流通」第3節「貨幣」において、商品流通の発展の結果生じる「黄金欲」として説かれている。「商品の金蛹を固持する必要と熱情」とによって、売り $W-G$ が「物質代謝の単なる媒介から自己目的になる」というのである⁴⁷⁾。

ここでは価値の抽象的性格は、社会的物質代謝の一環という社会性を前提としてではなく、個別的な行為の結果として導き出されている。ただし、貨幣の力が増大すると「質的には無制限」なものとなり、無制限な蓄蔵衝動を生み出すという論理は、商品流通の拡大によって「どんな商品にも直接に転換される」ようになるからとされており⁴⁸⁾、拡大する商品流通の総和を社会的物質代謝の総体と同一視することによって成り立っている。

このように、資本への展開はその萌芽を冒頭の商品に含んだものとしてではなく、商品流通の発展を背後に予定しながら貨幣が生みだしたものとして説かれている。資本の運動という個別的な行為は、商品流通の発展に不可欠な活動としてではなく、その結果として位置づけられているのである⁴⁹⁾。

44) Marx (1867) S. 163 訳194頁

45) *Ibid.*, S. 167-168 訳198-200頁

46) *Ibid.*, S. 168 訳200頁

47) *Ibid.*, S. 144-145 訳170-172頁

48) *Ibid.*, S. 147 訳174頁

49) 高須賀は、「全面的商品交換においては特殊な商品（労働力、土地、貨幣）をのぞけば、その所有者はすべて資本家である」（高須賀（1979）45頁）とする。ただし、共同体間で

VI 商品所有者としての関係性が支配的な社会—「借地農業者」と「自作農」

そこで、あらためて「農業諸民族が優勢であったということ自体によって、まさにあたえられている」、すなわち共同体の空隙・空所の存在であるがゆえの商業民族の「純粋性（抽象的規定性）」⁵⁰⁾に目を向けることとしよう。空所の商業民族における商品・貨幣形態の純粋性をもたらした特定の社会関係を明らかにしておくことは、歴史的な発展の理論化ではなく、発展した資本主義社会からの商品の抽象方法を再考するための鍵となろう。すなわち、「商品形態が労働生産物の一般的な形態であり、したがってまた商品所有者としての人間の相互の関係が支配的な社会関係であるような社会」⁵¹⁾とはどのような社会として抽象されるべきかを検討していきたいのである。

まずは、所有者にとって非使用価値であり、全面的に価値であるという商品の本来の性格は、社会的物質代謝の全面的媒介という世界でこそ純粋に現われるものなのかみておこう。マルクスは、「彼らの売る商品が土地生産物であるという点では、同一の経済的関係のなか」にいながらも、生産物の主要部分を「自分で消尽する」「フランスの自作農」と、「自分の生産物の販売に全面的に依存」している「イギリスの借地農業者」を対比させ、「社会的な諸欲求の体系がより多面的となり、個々人の生産がより一面的となるにしたがって、つまり労働の社会的分割が発展するにつれて、交換価値としての生産物の生産が、あるいは言い換えれば、交換価値であるという生産物の性格が、決定的となってくる」と結論づける⁵²⁾。そこから「単純流通の前提」が、「各人が万人の生産に依存しているとすれば、万人もまた各人の生産に依存しており、彼らはす

、の商品交換が、「共同体の首長」によるものとされ、その自由な評価と処分とによって余剰物を生産した共同体労働を「自己労働」とする擬制を生むものと捉えられたうえで（同35頁）、「資本家」はもっぱら、「生産に直接・間接に要した全労働」を「自己労働」に擬制する評価主体として位置づけられている（同45-46頁）。そこには、保有する商品・貨幣の価値を維持し増殖させようとする所有者としての「資本家」の側面は含まれていない。

50) Marx (1857/58) S. 42 訳①61頁

51) Marx (1867) S. 74 訳81頁

52) Marx (1858-61) S. 51-52 訳116-117頁

べて相互に補完しあっているということ」だとするのである⁵³⁾。

だが、個々の商品所有者・商品生産者にとって、「商品」=(交換)価値であることの全面性と、社会的物質代謝の媒介という意味での全面性とは、異なるものであることに注意が必要である。確かにマルクスのように、後者を前提とすれば、前者も導き出されることになろう。しかし、後者の全面性とは、生産物が直接に、ないしは商品交換以外の関係性を通じて消尽されることがないということを意味しているのであって、その前提によって消去法的にすべての個人にとって生産物が商品でしかありえないと規定しているにすぎない。

「イギリスの借地農業者」が生産物を商品として生産し、その販売に全面的に依存するのは、イギリス社会の全面的な商品経済化の如何とは直接にはかかわらない。たとえ共同体による生産が大きく残存している社会の中にあっても、「借地農業者」というあり方によって一生産条件との結びつきを媒介してきた共同体的な関係から分離された度合に応じて、自らの生産物の商品としての販売への依存を強いられるのである。おそらくは古代世界の「傭兵」が、自らの「労働力」の販売に全面的に依存していたように。

実際には「借地農業者」であっても、地代と種々の生産手段の補填に必要な部分をこえた余剰部分では自家消費も可能であろう。他方、「自作農」であろうと、たとえば肥料のような生産手段を商品として購入するようになれば、あるいは自らの生活=物質代謝において商品購入に依存する部分があれば、それらの分は自らの生産物の商品としての販売を強いられることになる。この対比では、フランスの「自作農」が近代的な意味で商品化された土地の所有関係にはないとすれば、両者の相違は、崩壊しつつあり大きく変質したとはいえ共同体の成員であることによって自然条件と結びついているのか、それともそこから分離され、生産過程から排除されているのかによるものとなる。すなわち、「自作農」にとっては、生産物の利用・消費のあり方、販売の有無にはかかわらず、土地などの生産条件との結びつきが生産=物質代謝を支えてくれるであろう。ところが、生産条件から分離・排除された「借地農業者」にとっては、

53) *Ibid.*, S. 52 訳118頁

私的に所有する物だけが、自らの富ないしは資源である。地代によって購入した土地の利用権・種々の商品として購入した生産手段、それらによる生産物である商品、そしてそれを販売して得た貨幣、こうした所有物によって、自らの生産条件を維持・再生産していかなければならない。「借地農業者」がその生産物を使用価値として消費しえない、自らにとっては非使用価値であるのは、その販売代金が得られずに、借地を継続するための地代支払等が困難となれば、自らの生存の条件を失うことになるからである。

このように、「イギリスの借地農業者」において、生産物の価値物としての性格が純粹に現われるのは、その社会的物質代謝における全面性というよりも、共同体とそれが媒介する生産条件からの分離・排除によって、互いに独立な私的所有者として相対するという「商品所有者としての人間の相互の関係」が徹底したことによるのである。このことは、共同体の間隙・空所における商業民族もまた、諸共同体の生産に依存してはいても、共同体の占拠する土地等の生産条件から排除された「空所」の存在であることによって、所有物との間で、そして人間相互において、私的所有者としての関係性が極限的にまで純粹な形態をとったことを意味しよう。

Ⅶ 「資源」としての非使用価値—商品の「資本性」

では、私的所有者としての極限的な関係性において、所有物はどのような意味で非使用価値であり、「価値」なのであろうか。

先の「イギリスの借地農業者」と「フランスの自作農」との対比において、マルクスは「フランスの自作農をイギリスの借地農業者に仕立てるためには、どのような経済的過程が必要とされるのかは、今では明らかである」⁵⁴⁾と述べていた。イギリスの封建制の解体過程の中で出現した独立自営農民が急速に姿を消したのは「囲い込み」=イギリスの「原始的蓄積」過程においてである。この原蓄は、労働力の商品化の条件=「二重の意味」で自由な労働者の創出の過程でもあった。

54) *Ibid.*, S. 52 訳117頁

宇野はいわゆる単純商品説を批判して、「資本家的な商品」から資本家的な生産関係を捨象することで、「この捨象された生産関係は資本家的生産関係としてそれこそ商品形態をその中心基軸とするものである。そういう生産関係を捨象した場合に初めて純粹に流通形態としての商品が抽象されるのではないか」としていた⁵⁵⁾。ただし、宇野は「あらゆる生産物が商品となるということは、いいかえればその生産物の生産者自身が自己の生産物を直接には消費しえないことにならなければならない。労働者のように自己の生産した生産物を商品として買わなければならないということになって、はじめて商品経済は全面的に徹底して行なわれてくる」⁵⁶⁾として、基本的な社会関係自身が商品形態を有していることを、全面的な商品交換社会の想定根拠としている⁵⁷⁾。だが労働力が商品化されることそのものは、流通形態としての商品のどのような性格を現わしているのであろうか。ここではまず、「商品」形態を与えられた労働力と、その所有者である労働者との関係性をみておこう。

マルクスが明らかにした労働力が商品化する第一の条件は、「労働力の所有者が労働力を商品として売するためには、彼は、労働力を自由に処分することができなければならない、したがって彼の労働能力、彼の一身の自由な所有者でなければならない。労働力の所有者と貨幣所有者とは、市場で出会って互いに対等な商品所有者として関係を結ぶのである」⁵⁸⁾という、いわゆる身分関係からの自由である。これは互いに「私的所有者」として相対するという商品経済的関係性が、労働力にまで貫かれるという条件であるが、商品経済的な関係性にとって共同体が制約となってきたことからすれば、「農奴」や「奴隷」といった隷属的な関係性からの解放は、共同体の解体による商品経済的関係性そのも

55) 宇野 (1963) 10頁

56) 宇野 (1947) 28頁

57) この宇野の説明は、マルクスによる、近代的工場の労働者を例にして「彼が交換価値をまったく生産しなかったとすれば、彼はおよそなにも生産しなかったことになる。なぜなら、彼が手を触れて「これは私の生産物だ」と言うことができるような、手につかめるような使用価値は、なにひとつないからである」(Marx (1858-61) S. 52 訳117頁)とする「単純流通」想定論拠と、結果的にはきわめて近いものとなっている。

58) Marx (1867) S. 182 訳220頁

のの普及条件でもあった。

そして、第二の条件は「労働力所有が自分の労働の対象化されている商品を売ることができないで、ただ自分の生きている肉体のうちにだけ存在する自分の労働力そのものを商品として売り出さなければならない」⁵⁹⁾ということである。そのためには、「ある人が自分の労働力とは別な商品売るためには、もちろん彼は生産手段たとえば原料や労働用具などをもっていなければならない。彼は革なしで長靴をつくることはできない。彼にはそのほかにも生活手段も必要である。……人間は、地上に姿を現わした最初の日と変わりなく、いまもなお毎日消費しなければならない」ということから、「労働力のほかには商品として売るものをもっていなくて、自分の労働力の実現のために必要なすべての物から解き放たれており、すべて物から自由である」ことが求められる⁶⁰⁾。このいわゆる生産手段からの自由とは、生産過程から完全に排除されていることを意味している。共同体に媒介された生産過程から排除された上で、「借地農業者」のような私的所有物としての生産手段の所有からも自由となることで、彼らこそ最も極限的に商品経済的な関係に投げ入れられてしまった存在である。原蓄とは、封建制の解体によって世界のいたるところに「空所」が創り出される過程なのである。

こうした「空所」にある自由な労働者にとって、唯一の所有物である自らの労働力はどのようなものとして立ち現われるのであろうか。彼らは、その労働力を完全に手放して生活手段に交換してしまうわけにはいかない。それではもはやすべてを失い、「毎日消費」していくことができなくなろう。そこで彼らは「ただ一定の時間を限ってのみ労働力を売る」という形で「労働力を手放してもそれにたいする自分の所有権は放棄しない」⁶¹⁾ことが必要なのである。ここでは労働力は単純に生活手段を入手するための交換手段ではなく、永続的に生活手段を入手し続けるための手段であって、その力を維持していくことが求

59) *Ibid.*, S. 183 訳221頁

60) *Ibid.*

61) *Ibid.*, S. 182 訳220頁

められるのである。

こうした行為は、「自分の貨幣を利子生み資本として増殖しようとする貨幣所有者」の譲渡する貨幣が、「ただしばらくのあいだだけ彼の手から離れ、…支払われてしまうのでも売られるのでもなく、ただ、貸し出されるだけ」であるのと⁶²⁾、形式としては同型である。生産過程から排除され貨幣のみを所有する私的所有者であれば、ただ一定の時間を限ってのみ貨幣を売ること、唯一の資源である貨幣を減ずることなく生活手段を入手し続けなければならないであろう。

もっとも、貨幣と異なり労働力は生産過程において一さらには生存そのものによって一疲弊し消耗していくものであって、賃金によって購入される生活手段と種々の活動とによって「再生産」されなければならない。やはり労働者は「資本家」ではないのであって、賃金は「賃料」として増殖分を意味するわけではなく、再生産の費用とみなされるものである。ただ、労働力が商品形態を与えられるということのうちには、自らの所有物が、単に他の商品への交換力としての価値というよりは、自分を維持していくことが求められる資源という意味での価値を内包するものとして意識されるという「増殖」の契機が一貨幣に喚起された黄金欲に媒介されることなく一芽生えているように思われるのである。

さて、生産過程から排除され自由な彼らに、何らかの私的所有物があれば、それらを直接に消費することや、あるいは完全に手放して他の生活手段と交換してしまうことは避けられるであろう。所有物は唯一の資産であり、維持され増殖することで、永続的に生活手段を入手し続けるための資源と意識されることになる。生産手段として、あるいは生産手段との交換に利用して、その補填と生活手段とを入手しうる力を有するだけの生産物を商品として生産しなければならない「借地農業者」にとっても、また、交換・取引で利用することで、同様に「毎日の消費」を実現しつつ、その力を維持しなければならない空所の「商業民族」にとっても、その所有物が商品として交換される際の基準は、資

62) Marx (1894) S. 355-356 訳429頁

源としての維持・増殖なのである。

彼らにとって、商品に内属している「力」とは、単に他の商品を引きつける力というにとどまらない。他の商品を引きつけながらも、自らの力を減ずることなく維持していくことが期待されているのである。そこでは、私的所有物が、資源であるがゆえに自ら消費しえない非使用価値であり、資源としての「増殖性」を内包したのものとして、商品へと転化していくのである⁶³⁾。

参照文献

- Marx, Karl (1857/58), *Ökonomische Manuskripte 1857/58*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, II-1, Dietz Verlag, 1976, 1981. (資本論草稿集翻訳委員会訳, 『資本論草稿集①②』, 大月書店, 1981年, 1993年)
- Marx, Karl (1858-61), *Ökonomische Manuskripte und Schriften 1858-61*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, II-2, Dietz Verlag, 1980. (資本論草稿集翻訳委員会訳, 『資本論草稿集③』, 大月書店, 1984年)
- Marx, Karl (1867), *Das Kapital: Kritik der politischen "Ökonomie*, I, 1867, in *Marx-Engels Werke*, 23, Dietz Verlag, 1962. (マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論第1巻』大月書店, 1968年)
- Marx, Karl (1894), *Das Kapital: Kritik der politischen "Ökonomie*, III, 1894, in *Marx-Engels Werke*, 25, Dietz Verlag, 1964. (マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論第3巻』大月書店, 1968年)
- Smith, Adam (1776), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776, in *The Glasgow Edition of The Works and Correspondence of Adam Smith* II, Oxford UP, 1976. (大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富(一)』, 岩波書店, 1959年)
- ウェーバー, M. (1955)『一般社会経済史要論下巻』黒正厳・青山秀夫訳, 岩波書店

63) 彼ら私的所有者の商品所有者への転化は、したがって同時に「資本家」への転化を孕んでいよう。もとより彼らも生活手段を購入する段においては、その関心は欲望の満足にあり、貨幣は「最終的に支出」されることになる。「資本家」たりえない労働者の買いG-Wも同様である。商品所有者としての人間の相互の関係を、空所にすむ独立した私的所有者のそれと捉えるのは、商品の一面を純粋に考察するためのいわば極限的な想定であって、商人ばかりで構成されるような市場が一般的な形態であるわけではない。それでも、冒頭の商品に「資本性」が内包されていることを明らかにすることは、流通形態の展開に示される商人資本の原理的な位置づけ、市場の組織性における商人資本の役割等の従来の理解にも再考を迫ることとなろう。

宇野弘蔵（1947）『価値論』河出書房（引用は、こぶし書房刊、1996年より）

宇野弘蔵（1959）『マルクス経済学原理論の研究』岩波書店（『宇野弘蔵著作集第四巻』、岩波書店、1974年、所収）

宇野弘蔵（1963）『経済学ゼミナール（2）価値論の問題点』法政大学出版局

高須賀義博（1979）『マルクス経済学研究』新評論

ポランニー、K.（1989）『人間の経済 I』玉野井芳郎・栗本慎一郎訳、岩波書店

The Character as Capital of Commodities

Hideaki Tanaka

Abstracts

The exchange of commodities begins on the boundaries of communities. From this perspective, this article views Marx's theory of the forms of circulation, especially his concept of commodities. In order to consider purely the form of commodities and the value of commodities, we need to presuppose the relation of reciprocally independent owners of commodities that are divorced from the process of production, like trading nations, who exist in the interstices between communities.

Private owners divorced from the process of production have to use their property not for the exchange to obtain the objects of their desire, but as the resources to keep living in the interstices. Under the relation, commodities have the character as capital from the beginning.